



開田高原の草地の来歴を探る

開田高原は御嶽山の北東麓に広がる標高 1000 ～ 1500 m の緩傾斜地です。近世から木曽馬の産地として知られ、1955 年になっても 687 頭の馬が飼養され、約 5000ha の草地がありました。戦後馬の減少とともに草地も消失してきましたが、1 戸の牛農家が採草を続けてきた約 0.5ha の草地が、複数の希少な昆虫や草本類が生息・生育するとして、2015 年に県の保護区に指定されました（p2 参照）。かつて馬の冬の飼料はススキ等の乾草がほとんどで、農家は乾草用の干草山を持ち、2 等分し 1 年おきに利用し、その年利用する草地では良質な草を採るため春先に火を入れていました。当草地ではこうした干草利用が続けられており、生態学者は隔年で春先の火入れと秋の刈取りを繰り返す「伝統的草地管理」が希少種の生息・生育に関わってきたのではないかと考えています。

一方、日本の里山でみられる草地性の希少種の多くは、現在よりも寒冷で草原が広がっていた氷期に大陸から渡ってきた遺存種で、縄文時代以降温暖化により森林化が進むなか人が維持した草地の中で生き延びてきたとも考えられています。また近年、日本の土壌の 1 つである黒ボク土が草地の歴史と密接に関わっていることが注目されています¹⁾。各地の黒ボク土層には細かい炭（微粒炭）やススキやネザサ等の植物珪酸体が多く含まれていること、黒ボク土層の最下部の土壌の放射性炭素年代が縄文時代の値を示す場合が多いこと等が明らかになり、黒ボク土は縄文以降火で維持された草地下で生成されてきたものが多いと考えられるようになってきたのです。

開田高原にも黒ボク土が分布しています（巻頭言参

照）。開田の希少種たちも縄文以降人が維持した草地の中で生き延びてきたのでしょうか。そうだとすれば、草地を維持した人間活動はどのようなものだったのでしょうか。また、「伝統的草地管理」はいつ頃成立したのでしょうか。開田高原の遺跡・遺物、明治期の大馬地主による馬産や土地利用景観を手がかりに草地利用の変遷を考えてみました。

図 1 に開田高原周辺の遺跡の時代別分布を示します。旧石器時代の遺跡は高原域にあり、ナイフ形石器、尖頭器、削器等が出土します。縄文草創期は高原域から有舌尖頭器や土器が出土します。縄文早期には集石炉、土器、石鏃等が高原域と低地から出土します。縄文前期になると住居址が出現する一方、高原域で遺跡は減少します。縄文中期には遺跡は高原域でなくなり、低地で増加し、住居址、土器、石鏃、石錘、打製石斧、磨製石斧、石皿等が出土します。縄文後期には低地でも遺跡は減少し、弥生～奈良時代にはほとんどなくなります。平安時代になると、遺跡は再び低地から高原域まで分布し、低地からは住居址、陶器、鉄器（鎌、紡績車、鉄鏃等）、炭化した米や大豆、高原域からは陶器片が出土します。

幕末から戦前の大馬地主であった山下家（図 2）に残る 7 冊の古記録を解読した結果、同家の 2 歳馬数は明治以降急増していました（表 1）。

図 2 は明治中期の西野地区下向の土地利用景観をみたものです。農家は段丘崖下の河岸低地に疎らに集合し、その間に畑が分布していました。水田は河岸低地を占め、段丘面にも分布していました。段丘面には畑も多くありました。その上部は原野で中に畑が点在していました。

先史時代の開田高原周辺の人間活動については次のように推測されます。①旧石器時代から縄文草創期には、高原域が移動生活を営む人々により狩猟採集の場として利用されていた。②早期以降人間活動は低地に拡大し、中期には多くの人々が低地に定住し植物利用を盛んに行うようになった。③後期以降人口は減少し、弥生～奈良時代はほとんど人がいなくなった。④平安時代以降、人々は再び低地を中心に定住し始め、畑作や稲作、馬産等を組み合わせた生業が営まれ、武装する人もいた。

縄文以降、開田高原でも森林化がすすむなかで、人々は食料となるシカや

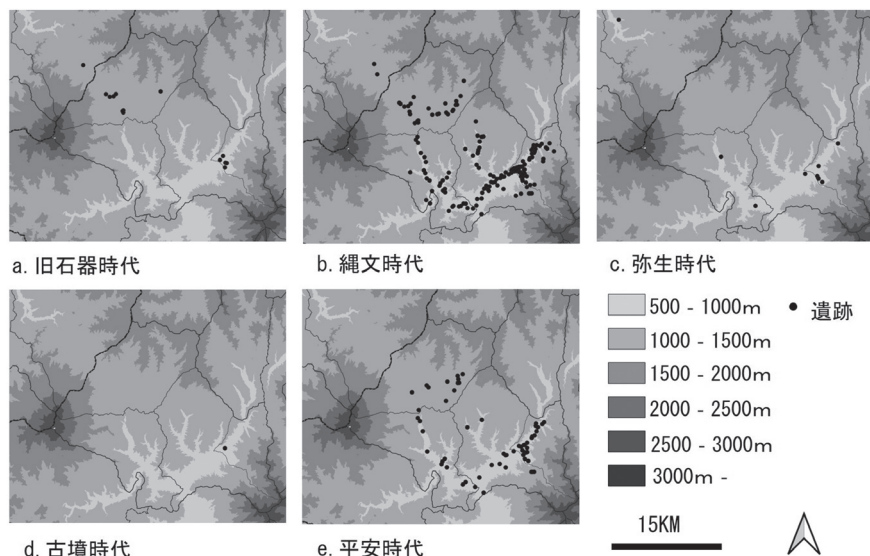


図 1 開田高原周辺における遺跡分布の変遷
「開田高原大原遺跡」「木曽福島町史」「日義村誌」「三岳村誌」を用いて作成。

表 1 山下家が所有・売却した 2 歳馬数

西暦(和暦)	所有2歳馬数	売却2歳馬数
1870(明治3)	24	
1873(明治6)		53
1886(明治19)	122	
1888(明治21)	81	
1894(明治27)	108	70
1909(明治42)		79

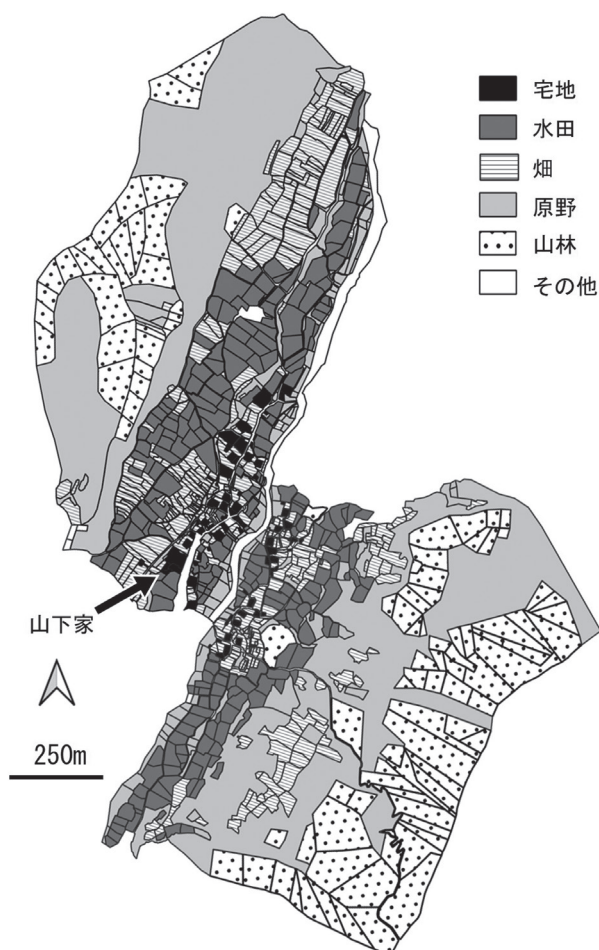


図 2 明治中期の開田村西野地区下向の土地利用景観
1891(明治24)年作成の地籍図を用いて作成。

イノシシ、山菜や木の実を確保するために、森林に火を入れ、草地を維持し始めたのではないのでしょうか。それは開田高原から遺跡がなくなる縄文中期から奈良時代にかけても同様で、そうした原野に平安時代以降馬を伴った人々が住むようになったのではないかと私は考えています。

歴史地理学者の石田寛は、近世放牧山村の農業形態の原型を「垣外不規則な耕牧輪換、垣内耕牧輪換」であったと考えました(図3)。家屋と菜園の周りを内垣、その周りの農地を大垣で囲い、農期には大垣の外側に牛馬を放ち、農閑期には大垣の内側で牛馬を放牧する、大垣の外側は良い場所があれば柵をして焼畑をし、焼畑を放棄した後は採草地や放牧地として利用す

るといった慣行です。そして農地が拡大し農業が集約化するとともに、垣外は規則的に利用されるようになり、牛馬は柵で囲んだ放牧地で放牧されるようになったと述べました。

17世紀の開田高原でも馬産と焼畑が行われており、「垣外不規則な耕牧輪換、垣内耕牧輪換」の農業形態があった可能性があります。明治期の下向には、集落の周りにまとまった農地があり、その外側に原野が広がり、原野の中に畑が点在していました。原野の中の畑はかつての焼畑のようにも見えます。

しかし、18世紀初頭に尾張藩は焼畑を禁止します。農家は常畑を増やしたり、常畑に厩肥を投入し生産性を高めたりする必要が出てきました。18世紀半ば頃からは水田開発が始まります。この時期は、信州中馬(陸上運送業)の需要が高まり、木曾代官が馬市で2歳馬を自由に売買させ始めた時期でもありました。19世紀になると木曾福島に大馬地主が現れます。開田高原でも馬が増え草の需要が高まると、林野をめぐる集落同士の争いが増え、入会林野を各戸に分割して利用させる割山化が進みました。

明治から昭和初期にかけて水田開発が盛んになると、さらに厩肥が必要になりました。その結果、開田高原でも山下家のような大馬地主が現れ、周辺地域の農家に盛んに母馬を貸すようになりました。木曾福島の馬市が日本三大馬市の一つとなるのはこの頃です。

これらから、開田高原の草地は17世紀には焼畑・採草・放牧・狩猟等に重層的に利用されていたのが、18世紀以降農業が集約化し馬が増加するとともに採草地と放牧地と山林に分化していったことが推測されました。「伝統的草地管理」といわれる集約的な草地利用が成立するのは、入会林野の分割が始まった19世紀以降ではないかと考えています。

(浦山 佳恵/自然環境部)

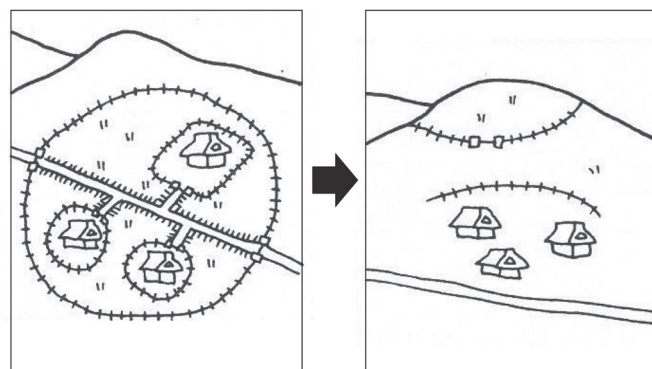


図 3 牧柵にみる近世放牧山村の原型とその崩壊模式図
石田(1960)²⁾から抜粋。

- 1) 須賀 丈・丑丸敦史・田中洋之(2011) 日本列島における草原の歴史と草原の植物相・昆虫相。湯本貴和編「野と原の環境史」文一総合出版、101-122。
- 2) 石田 寛(1960) 放牧と垣内一耕牧輪換研究 第3報一。人文地理 12(2)、111-126。

